

## カミュとレジスタンス（その1）

平 田 重 和

第二次世界大戦後、レジスタンスの地下新聞『コンバ』紙 *Combat* の編集長になり、社説の副題に「レジスタンスから革命へ」*De la Résistance à la Révolution* というタイトルをつけ、革命を志向する論調の中で、対独協力派の「粛清」問題とからんで、フランソワ・モーリヤックと論戦し、一時話題となったカミュをみれば、レジスタンスにかかわった闘士というイメージが強いが、カミュが実際レジスタンスに関わったのは、比較的短期間で、パリ解放の前約一年ほどの間の短い期間だった。

しかし、ドイツ軍が劣勢になり、はじめは北フランスだけを占領していたナチス・ドイツがなりふりかまわず全フランスを占領下に収める事態になり、カミュがレジスタンスに関わるようになった時期は、レジスタンスの中でも、非常に過酷な危険を伴う時期であった。

42年も終りに近づき、「ドイツの形勢が東部をはじめ全前線で不利となり、受け身に転じだすと、南の自由地帯も占領下に置かれ、さらに年が明けて43年2月にドイツ軍がスターリングラードで敗れていよいよ敗色が濃くなると、ドイツ／ヴィシーは、ドリユの叫びにもあった通り、絶望の裏返しのように宥和政策をかなぐり捨てて、逮捕、収容所送り、銃殺といった暴力的な弾圧の強化に乗り出した。その極まった例が、44年6月、連合軍がノルマンディーに上陸した直後、それを迎え撃とうとして同地方に向かったドイツ軍が中部フランス、リムーザン地方、リモージュ北西の小村オラドゥール(＝シュル＝グラヌ)で、抵抗ゲリラによるドイツ人殺害の報復として、700人近くを人質に取り、虐殺した事件」<sup>1)</sup> など、スペインのゲルニカ・フランス版のような悲劇が起こっ

たのもこの時期である。

「ミュンヘン協定」(1938年 9 月)を破って39年 3 月には、チェコ全土を手中に収め、8 月には独ソ不可侵条約を締結し、ちやくちやくとナチス・ドイツは戦争による膨張を始めた。これに対し英仏は39年 9 月に、戦宣告し、第二次世界大戦が始まった。ナチス・ドイツ軍は40年 5 月には、オランダ、ベルギーに侵入、ついでフランスのマジノ線を越え、あっという間にパリを制圧した。この間フランスは抵抗らしい抵抗もしなかったもので、この時期を「奇妙な戦争」la drôle de guerre と歴史書が語っているところである<sup>2)</sup>。ナチス・ドイツは時のフランス政府に休戦条約を結ばせ、ペタンとラヴァルをトップに据えてナチス・ドイツの傀儡政権を打ちたてた。44年 8 月のパリ解放までの約 4 年間は、フランスにとっては屈従の悲劇的時期だったが、はじめの約 2 年間は、ナチス・ドイツも融和政策をとり比較的というか、表面的には、穏やかな時期だったと言える<sup>3)</sup>。

以上が、フランスでの第二次世界大戦初期の大雑把な経過だが、カミュがどのようにレジスタンスにかかわったかを具体的に見る前に、レジスタンス全般について、俯瞰しておこう。

### フランスにおけるレジスタンス運動

海原 峻氏が指摘しているように、フランス・レジスタンスの時期区分を行なって見れば、39年 9 月(開戦)から40年 6 月(休戦協定締結)が前史で、第 1 期は混乱の中でレジスタンス運動が開始され独ソ開戦に至る40年 6 月から41年 6 月22日まで。第 2 期は41年 6 月22日から42年11月の連合軍北アフリカ上陸及びドイツ軍のフランス全土占領まで。第 3 期は42年11月から44年 8 月のパリ解放の頃までである<sup>4)</sup>。

前史は、淡 徳三郎氏によると、のちにレジスタンスのなかできわめて大きな役割をはたすようになるフランス共産党でさえ、スターリンとヒトラーの握手(1939年 8 月の独ソ不可侵条約のこと<筆者注>)に妨げられて、ソ連に対するドイツの侵略が開始されるまでの最初の 1 年間は、フランスの敵であるドイ

ツに対して明確な方針を打ち出すことができず、当時彼らは、占領ドイツ軍に対するレジスタンスを組織するよりも、ド・ゴールを＜英米帝国主義の手先＞とみなし、これをこきおろすことの方に一層熱を入れていたほどである<sup>5)</sup>、と言った状態で、先の見通しがたたず、まだ明確な運動は形成されていなかったというのが実情である。

次に幾つかの歴史書およびカミュの先駆的業績を参考にレジスタンスの各時期を追い、レジスタンスが形成されていった過程を簡潔に跡付けてみたい。まず第1期はドイツ軍の占領によるフランス国民の茫然自失状態。ヴィシー政権による南部自由地帯の欺瞞的二重支配。その中での個別的なレジスタンス運動が発生する時期であった。この時期には、ペタン元帥への信仰と、彼のヴィシー政府が二面的政策（double jeu）によってフランスの利益を守るのではないかという期待が国民の間に根強く残っていた時期である<sup>6)</sup>。しかし、ドイツ軍のフランス国境突破いらい、7, 8百万のフランス人がドイツ軍の占領を敏感に察知し、住み慣れた住居を捨てて移動したものと推定されている<sup>7)</sup>。その実数については、5月13日の月曜日からパリとその郊外の子供たちが疎開を始めており、パリ市（1万670人）とその郊外（1万4844人）合計で2万5514人が疎開<sup>8)</sup>している。パリの状況は「鉄道の各駅でパニックが始まっていた。ブルターニュやアウステルリッツ行きが出るモンパルナス駅、南部行きが出るリヨン駅の混乱から始まった。・・・道路の車も渋滞で動かなかった。5分おきにやっと数メートルという有様だった。恐怖が人々を脱出へと駆り立てていた。パリ市民は、逃れてきたベルギー人の人々が語る虐殺に怯えていた」<sup>9)</sup>と桜井氏は当時の状況を描写している。

ところが、こうした状況もドイツとの休戦条約が発行した後には人々は徐々にパリへ戻ってきて、見た目は以前と変わりのない日常生活に戻るのである<sup>10)</sup>。

ロットマンのいうように、パリではナチスのパトロール隊が走り回っているこの陰気な配給制度下のパリでは、日常的な生活が続いていたばかりでなく、著作や出版も続けられ芝居の稽古や総稽古も行われていた。映画も上映されていた<sup>11)</sup>というのが実情のようだ。

時の政府はポール・レイノーが首相だったが、パリを去りまずトゥールへ、ついでボルドーへ移動したが、ここでレイノーは休戦やむなしの判断を迫られ、第一次世界大戦の英雄フィリップ・ペタン元帥に政権をゆだね、ペタンがドイツとの休戦条約を結んだのである。はじめ国民は休戦のため、一時的にホッとしたものの、やがてペタン政府がナチス・ドイツの傀儡政権であることが明白な事実であることを察知する。

1940年に政治小説『真昼の暗黒』を書き世界的名声を得、のちにカミュとも共著で死刑廃止論をあらわしたアーサー・ケストラーは敗戦間もないフランスの現状を次のように述べている。「フランス人は、また別種の抑圧されたコンプレックスに悩まされており、その表示は、さらに顕著である。軍が崩壊して、フランスの合法的政府が1940年6月に解体したとき、フランス人の大多数は敗北を承認し、勝利者のドイツと何らかの暫定協定を結ぼうと試みた。ヨーロッパは失われ、英国は絶望的に孤立させられたこの時、一般の、政治に関りのないフランス人にとっては、これが唯一の合理的な途だったのである。ド・ゴール将軍がロンドンで、“フランスは一つの戦闘 combat に敗れたが、戦争 guerre に敗れはしない”と声明したとき、フランス国内に閉じこめられていたフランス人は、大変結構な宣伝スローガンではあるが、現実とは何の関わりもないと考えた。それから約2年間、彼らは能う限り業務に励み、比較的平和を享受した。ド・ゴールの呼びかけに応じて、義勇軍に参加するため英国に脱出したり、抵抗運動に加わったのは、少数に過ぎなかった。これまたすこぶる当然なことであった。当時レジスタンスは、純粹の狂気か、ドン・キホーテ的猪突としか考えられなかったし、またあらゆる民族を通じて、英雄的狂人は常に極小の少数者であるからである」<sup>12)</sup>。

「比較的平和を享受した」と言ってもヴェルコールの『海の沈黙』に見られるように、心の底はドイツ軍に開かないという状態であっただろうことは想像するに難くない。

ド・ゴール将軍のロンドンでの声明とは、6月14日にパリがナチス・ドイツ

により完全に制圧されたあと、同月（6月）18日に、シャルル・ド・ゴール Charles de Gaulle 将軍によるロンドン BBC 放送からの歴史的なレジスタンスへの呼びかけのことである。この呼びかけは、フランスはペタン政府がドイツとの間に休戦条約を結んではいるが、フランスは完全にナチス・ドイツに屈服するものではなく、「自由フランス」La France libre を標榜するものであった。しかし、この当時ド・ゴール将軍はまだ無名の一将軍に過ぎず、生まれたばかりの「自由フランス」に集まってきたのは、それほど有名ではない二流三流の人物ばかり<sup>13)</sup>で、時のイギリス政府もド・ゴールをいわばイギリス軍の傭兵隊長として承認していたに過ぎないという状態で、ド・ゴールは国内的にも、国際的にもほとんどいかなる権威ももっていなかった<sup>14)</sup>というのが実情であった。

レジスタンス初期の運動は散発的に行われていたが、そのなかで最も早くかつ悲劇的な結末を迎えたのはパリの「人類博物館」Musée de l'Homme に勤務する若い民族学者 B・ヴィルデ B.Vildé や A・レヴィツキー A.Lewitzky を中心とする知識人の小グループが起こした抵抗運動だった<sup>15)</sup>。このグループは、40年7月から活動を開始し、脱走した捕虜の逃亡を援助し、ロンドンの「自由フランス」やイギリス情報機関と連絡をとっていた<sup>16)</sup>。しかし、レジスタンスの第一声をあげたこのグループは早々に壊滅する。ナチス・グループはたくみに「反抗グループ」にスパイを潜入させていたのだ。このグループの壊滅は、グループの内部に潜入していたフランス人のスパイによる告発のためだった<sup>17)</sup>。

次いで注目されるのは、パリのシャンゼリゼ大通りで行われた学生のデモだろう。これは1940年11月11日に行われたデモで、表向きはパリの学生による第一次世界大戦戦勝記念日のデモであったが、このデモは、三色旗を先頭にしてシャンゼリゼを行進し、ドイツに対する敵対精神の最初の公然たる発現であった点で、レジスタンス精神を鼓舞するうえで、人類博物館事件に劣らぬ役割をはたしたものである<sup>18)</sup>。数人の死者と多数の逮捕者が出て、パリ大学は閉鎖された。この事件に関するヴィシー政府の発表もまた国民に強い衝撃を与えたが、BBC 放送もこの事件を大きくとりあげ、フランス全土に知らせたのである<sup>19)</sup>。

12月15日には「救国国民委員会」Comité national de salut public と称するグループが非合法新聞『レジスタンス』の第一号を発行している。しかし、このグループも41年の2～3月頃に全員逮捕されるという憂き目にあっている。またしても「委員会」に潜入したスパイによる告発だったことが知られている。「救国国民委員会」の中には *NRF* の編集に関与していたジャン・ポーラン J. Paulhan もいたが対独協力派のドリュ・ラ・ロシェル Drieu la Rochelle の働きかけで釈放されている。多くの学者、教授、作家、詩人などが参加していたこのグループの裁判は、42年2月に行われ、死刑10名を含む判決が新聞紙上に大々的に報道されると、休戦によって眠りこんでいたフランス国民に大きな衝撃を与え、国民のレジスタンスへの目を開いた<sup>20)</sup> といわれている。

1940年末頃には、北部のレジスタンスとは別に南部自由地帯では、40年末頃から行動を始めていた < Libération > ・ < Franc-Tireur > , < Combat > の3組織が有力であった。カミュが後に参加することになる < Combat > はアンリ・フルネイ H. Frenay 大尉（1905～1988：1943-45に、臨時政府の閣僚を務めたこともある人物）の下に大きな軍事組織をもった最大・最強のレジスタンス組織であった。これら3組織は43年1月には統合されて < Mouvements unis de Résistance > を形成した<sup>21)</sup>。略して、MUR といわれているものである。

このうち < コンバ > Combat（闘争）についていうと、この組織は退役軍人で先述のアンリ・フルネイが中心となって結成された「国民解放戦線」Front National ——機関紙「ヴェリテ」Vérité ——と左派カトリック系のフランソワ・マントン（リヨン大学法学部教授だった）の周囲に結成された「リヴェルテ」Liberté との合流によって、1941年11月に新しい組織として生まれたものである<sup>22)</sup>。この新組織の機関紙が『コンバ』で、のちカミュが編集長となる地下新聞である。従って Camus が43年秋に『コンバ』紙の編集に参加したのは、南部地帯の最有力組織の地下新聞に参加した<sup>23)</sup> ということになる。

Libération は、元海軍士官で有名な新聞記者であったアンリ・ダスティエ・ド・ラ・ヴィジュリーが、コルニオン・モリニエ将軍やカヴァイエス教授らとともに開始した運動で、中仏地方のクレルモン・フェラン Clermont Ferand<sup>24)</sup>

で発足した組織である。

Franc-Tireur（義勇兵）という名の非合法新聞がはじめて姿を現したのは、1941年12月のことである<sup>25)</sup>。

フラン＝ティールールとはリヨンで急進派とカトリック左派、コミュニストによって設立された組織<sup>26)</sup>で、1940年に設立された「フランス＝リベルテ」の後継組織である。

ここで、桜井氏に倣って、レジスタンスの歴史を時系列に年表化すると・・・  
1940年

7－8月——人類博物館ネットワーク

9月——アンリ・フルネイ大尉の「国民解放」運動

11月——「北部解放」（社会党系）

「自由（リベルテ）」創設

「ノートル・ダム信徒会」（右派のレミ大佐＜本名はG. ルノー Renault）

12月——OCM設立（Organisation civile et militaire＝市民・軍人組織・知識労働者同盟の周辺で組織された）

「南部解放」（エチエンヌ・ダスティエ，ジャン・カヴァイエスら）設立

1941年

3月——「フラン＝ティールール」創設

6月(22日)——ドイツ軍，ソ連侵攻開始

これを受けてフランス共産党が，それまでの「帝国主義間の戦争」という位置づけを捨てて，反ナチの幅広い国民間の共闘を呼びかける。これまでは，ファシスト・ドイツよりも共産党は反英的な姿勢を全面にしていた。

8月——共産党の大衆軍事組織「フラン＝ティールール・エ・パルティザン・フランセ Franc-Tireur et partisans français（FTPF，通称FTP）」結成。

11月——フルネイの国民解放運動と「自由（リベルテ）」が統合して「コンバ」（闘争）を結成。「国民戦線」（共産党系）が設立される。

1942年

1月——ジャン・ムーラン J.Moulin が、南部抵抗組織の統合を目指してフランスにパラシュート降下する。

11月——連合軍、北アフリカ上陸。南部もドイツ軍占領下に置かれる。トゥーロン港のフランス艦隊自沈（これはドイツ軍による接收を危惧したもので戦略的意図で実行されたものであった）。

1943年

1月——ジャン・ムーランの努力で「コンバ」、 「南部解放」、 「フラン＝ティールール」が統一抵抗運動（MUR < Mouvements unifiés de la Résistance）としてまとまる。

2 - 3月——ド・ゴール將軍とジロー將軍の覇権争い

4月——2月に導入された STO（Service de Travail obligatoire = 義務労働徴用制度）を忌避逃亡した青年たちがマキ（Maquis）を結成。

5月——全国抵抗評議会（CNR < Conseil national de la Résistance）結成。

6月（3日）—フランス国民解放委員会（CFLN < Comité français de libération nationale）結成。ロンドンの国民委員会とアルジェの民軍総司令部の合同。

（21日）—CNR 議長ジャン・ムーラン逮捕される（この逮捕も内部の密告だったが、彼はナチス・ドイツの親衛隊によってその後虐殺されている）。

その他にも小グループがいくつかあったが、北方地帯の諸運動としては「リベラシオン・ノール」（北部解放）、「民事軍事組織」（OCM）、「国民戦線」などがあった<sup>27)</sup>。

ド・ゴールの「自由フランス」は先で見たように、産声をあげた当時は無名の存在だったが、いろいろ紆余曲折はあったものの次第に市民権を得てくる。



41年の11月には、ド・ゴール將軍は、南部非占領地帯にジャン・ムーランを、北部占領地帯にレミー Rémy 大佐を統合工作のため派遣している。この重大な使命をド・ゴールから託されて、ロンドンからフランスに派遣されたジャン・ムーランは人民政府内閣時代、航空相官房長官を務めたこともあり、1940年6月のフランス降伏当時は、ユール・エ・ロワール Eure et Loire 県知事の職にあった人物だった。マクス Max という仮名で活躍していたが、先述したように、のちに彼は本国で活動中に逮捕され、ひどい拷問のなかで死んでいる<sup>28)</sup>。

一方共産党にとって、41年6月の独ソ開戦は、フランス共産党を独ソ条約(39年8月)の悪夢から覚めさせ、個々ばらばらに自然発生的にレジスタンスに参加していた党員は統合される方向に向った。それによって共産党系のレジスタンス組織は強化拡大され、レジスタンス全体の中で重要な比重を占めるようになった。さらに41年10月のシャトーブリアン Châteaubriant（地名<筆者注）における人質銃殺事件（ドイツ人が殺されるたびに、殺されたドイツ人の地位に応じて、何倍、または何十倍のフランス人を殺すしくみ<淡 徳三郎著『レジスタンス』（新人物往来社）p.72参照）>など、ヴィシー政府の対独協力政策は国民の不信と不満を増大させ、ペタン神話はくずれ始め、レジスタンス運動は次第に国民大衆の中に拡がっていった<sup>29)</sup>。

1941年6月22日の独ソ開戦とともに、独ソ不可侵条約の締結という奇怪な事実によって金しぼりになっていたフランス共産党が、やっとこの呪縛から解放され、いまやはじめて、その本来の敵ナチス・ドイツと真正面から戦いうることになった<sup>30)</sup> ことは、レジスタンス史上大きな出来事だった。

共産党は、一方ではヒトラーと握手したスターリンを弁護しながら、他方ではフランス国民の利益を代表して、ドイツにたいするレジスタンスに参加しなければならないというジレンマから解放され、彼らが昨日まで敵視していたイギリスやド・ゴールの「自由フランス」と肩をならべてレジスタンスの第一線にたちうること<sup>31)</sup> となったからである。

この間フランス国籍を持つユダヤ人迫害も徐々に始まっている。ナチス・ド

イツによるユダヤ人迫害があまりにも有名なためこうした事実は闇に葬られがちだが、フランス人によるドイツに加担したスパイの問題、ユダヤ人迫害の問題もフランス歴史の汚点として止めておく必要はあろう。先でも触れたようにレジスタンス運動家の逮捕は、組織へ潜入したスパイの密告によるものが多く、またナチス・ドイツの手先となったフランス人の民兵（Milice）や警察による逮捕、虐殺もあり、異民族による支配の上に、さらに陰惨な同国人による密告、弾圧、虐待も行われたのである<sup>32)</sup>。最初の大きな迫害は1941年12月12日に行われている<sup>33)</sup>。

第3期を画する連合軍の北アフリカ上陸は、第二次大戦全体からみても重要なターニングポイントの一つであった<sup>34)</sup>。イギリスはいまだド・ゴールの「たたかうフランス」を前面的に信用していたわけではなかったが、「なんと言っても決定的なのはフランス本国にいる4000万のフランス人の動向である。これらのフランス人が「たたかうフランス」を国民的レジスタンスの最高の表現とみなすかどうか、ド・ゴールの運命にとっての分れ道<sup>35)</sup>となった。

連合軍の北アフリカ上陸に際しては、ド・ゴールとのライバル関係にあったジロー Giraud 将軍の方が連合軍に信用されていたこともあり、政治的にいろいろないきさつもあったが、最終的にはド・ゴールが権力闘争で勝利し、以後レジスタンス運動はド・ゴールを中心に動いて行くことになる。

ド・ゴールを単一議長とする事実上の臨時政府「国民解放委員会」が樹立され、フランス本国では諸種のレジスタンス運動間の連絡、協議、統一が漸次進行し、情報、宣伝、軍事、行政、社会的救済などの全国組織をもち、ついに1943年5月、「たたかうフランス」の旗のもとに南北両地帯のすべての主要なレジスタンス運動を結集した「全国抵抗評議会」CNRが成立する<sup>36)</sup>にいたったのである。この全国統一に大いに功績があったのが、ジャン・ムーランだった。

ナチス・ドイツ占領軍のレジスタンスに対する弾圧は厳しく、苛酷なものであった。レジスタンス参加者は、逮捕されれば、強制収容所への移送、拷問、処刑などの運命が待っていた。この処罰は見せしめのため家族にまでも適用さ

れたのである<sup>37)</sup>。

実際、4年間の占領期間中、3万人以上の愛国者が処刑され、10万近い人々がドイツに移送され、そのうち生き残ったものは5万名に過ぎない。そのほか、3万5000名の男女がヴィシー政府の法廷で有罪の判決を下され、7万名の“容疑者”が拘禁され、3万5000名の官吏が罷免され、1万5000名以上の軍人が降等された<sup>38)</sup>、と淡氏はのべている。

レジスタンス運動の中で、マキとゲリラの活動を忘れるわけにはいかない。ますます強まるドイツの要求にこたえるため、1943年2月16日、ついに「義務労働徴用制度」(STOと略す)<sup>39)</sup>が公布されるにいたった。しかし、この制度はのちに皮肉にもナチス・ドイツとヴィシー政府に大きなダメージを与えることになる。というのはある意味では、安閑としていた農民大衆の間にさえ、根強い反独ならびに反ヴィシー感情を植え付けてしまったからである。1943年以来、さまざまなレジスタンス運動と連絡しながら、あちこちの山や森に、あるいは20人、あるいは30人と群居して潜伏し、いわゆるマキ団(Maquisとは、元々はコルシカや地中海沿岸の灌木地帯、雑木林を意味するが、転じて第二次世界大戦中の抗独レジスタンス運動の組織、参加者、または彼らが身を潜めた森や山岳地帯を意味する語でもある。従ってマキ団とはここでは抗独レジスタンス運動の組織のことである)を形成<sup>40)</sup>し、あらゆる機会にマキ団はゲリラ戦法でレジスタンス活動を展開した。

1943年10月、リヨンにおいて全フランスのマキ地方主任会議が開かれ、武器が不足しているにもかかわらず、ゲリラ活動を積極的に行う必要が決議され、それ以来全フランスにわたって、マキの活動が一層活発に展開<sup>41)</sup>されるようになった。

当時フランス国内には、それぞれ独自の命令系統をもった三つの主要なレジスタンス武装組織があった。第一は、先述の Mouvements unifiés de la Résistance (MUR) という名称のもとに統一された南方地帯の諸レジスタンス運動 (Combat・Franc-Tireur・Liberation 等) に属する軍事グループを結集したもので、Armée secrète(略して AS = 秘密軍隊)と呼ばれていた。第二は、

これも先述した Franc-Tireur et partisans français (略して FTPF = フランス義勇遊撃隊) と名のる共産党指導下の軍事組織である。第三に, Organisation de Résistance de l'Armée (略して ORA = 軍隊抵抗組織) と名のるグループ<sup>42)</sup>があった。

連合軍の上陸に呼応して国民蜂起を効果的に展開するためには、これらばらばらの組織が一体となり、統一した作戦計画にもとづいて行動することが必要であった。こうして1944年2月1日、フランス国内のすべてのレジスタンス武装組織を Forces françaises de l'intérieur (略して FFI = フランス国内軍) という名称のもとに統合することが、「全国抵抗評議会」の名で正式に決定<sup>43)</sup>されたのである。

共産党の指導する「軍事行動委員会」と臨時政府によって任命された「軍事代表」とのあいだには、蜂起の展開のなかで、しばしば意見の衝突が生ずるのであるが、それにもかかわらず、フランス国内のすべての不正規軍隊が、たとえ形だけにしても、単一の名称のもとに統一されたことの意義は、はかり知ることのできないほどおおきかった<sup>44)</sup>。

このように国内と国外のレジスタンスが統一されたことは、フランスそのものの国家としての自己統治能力とその現実的基盤を諸外国に認めさせることになり、内外のフランス軍の総司令官に任命されたケニグ将軍は、連合軍最高司令官アイゼンハワー将軍と協力<sup>45)</sup>し、1944年3月にレジスタンス行動綱領 Programme d'Action de la Résistanceが作成され、同年8月にパリが解放され、ついでフランスが解放されることになったことは歴史がたどったところである。

### カミュとレジスタンス地下紙『コンバ』紙 *Combat*

1940年1月にアルジェで発行していた *Le Soir Républicain* 紙が発行停止処分を受けたので、カミュは職を失った。アルジェリア総督から追放処分を受けたのという説もあるが、「職を失った」というのが、どうも現実のようだ。先に本土フランスへ帰っていたパスカル・ピア Pascal Pia が娯楽新聞 Paris-Soir 社<sup>46)</sup>にカミュを紹介し、ここへ就職することになったので、40年3月にカミ

ユはパリに到着している。40年3月という時期はフランスでは歴史上非常に奇妙な時期である。1939年9月1日にドイツは、ポーランドに対する電撃的侵略を開始した。これに対しフランスは総動員令を発し、3日にはフランス、イギリスがドイツに対して宣戦布告を行ったので、ドイツとの交戦中にカミュは、パリへ「上京」したのである。しかし、フランス軍はザール地方に進出したただけですぐに撤退し、翌年4月まで結局戦闘行為らしきものはなく、8ヶ月が過ぎた。前述したように歴史書が「奇妙な戦争」la drôle de guerre と言ってる時期である。従ってカミュは「戦争の暗雲」と言った雰囲気は充分感じとっていたことは、容易に察せられるが、ドイツ軍のパリ制圧が6月14日なので、「普通のパリ」へ到着したという感じではなかっただろう。

Paris-Soir 社での仕事は、新聞記者というのではなく雑用係のようなものだったらしく、カミュとしては満足のゆくものではなかっただろう。従って、この新聞にカミュは記事を書いていない。

やがてドイツ軍がパリを占領したので、Paris-Soir 社はフランス中部のクレールモン＝フェランに非難し、ついでリヨンに居を移すことになる。

この時期、カミュはピアの友人たちのために、反ファシズムを旗印とする週刊誌「リュミエール」*La Lumière* に二つの記事を書いた。一つはモーリス・バレス Maurice Barrès を甦らせようとする右翼知識階級の試み（当時一般的であった）に基づいて、この作家を新しい視点から見直したものであり、もう一つはジャン・ジロドゥー Jean Giraudoux の『オンディーヌ』*Ondine* の再演に関する批評であったが、後者は、カミュにとって、パリで実地に幾つかの舞台を見たあと、現代演劇についてものを書く最初の間機となった<sup>47)</sup> ものであった。

しかし、この時期にカミュにとって最も重要なことは40年5月に『異邦人』を書き終えたことと、『シジフォスの神話』を書いていたことであろう。

書き終えた『異邦人』の原稿を大切に引き出しの中にしまったまま、カミュは新聞社の苦役に従事しなくてもいいときには、半日を『シジフォスの神話』の執筆<sup>48)</sup> にあてるといふ生活を送っていた。

召集されていたP.ピアがりヨンに帰ってきて編集庶務係りに復帰したので、二人は一時期一緒に仕事したことになる。

この頃（1940年9月27日）カミュの離婚問題が最終的に決定されたので、カミュは再婚することもできた。第二の妻となるフランシーヌ・フォール Francine Faure が12月の初めにリヨンに着いた。彼らはフランシーヌが26歳になる一週間前の12月3日に結婚した。ところが12月の終わり頃に Paris-Soir 社は人員整理を行い、カミュも解雇組に入れられてしまったので、カミュは失職することになった。翌年1月に二人はフランシーヌの故郷アルジェリア第二の都市オラン Oran に帰ることになる。

アルジェリアの政治的状況は親ヴィシー派と反ヴィシー派が混在するという微妙な状況だった。41年1月にオランの妻の実家にカミュは身を寄せたが職はなく、家庭教師やユダヤ人学校の教師などをして、苦しい生活を送っていた<sup>49)</sup>。

この時期には、まだ反ヴィシー、反ナチ思想で明確な意志表示のような資料はない。敢えてあげれば、1941年5月24日の *La Tunisie française* 紙に寄せた「麻屑の火のような」*Comme un feu d'étoupe* における「上陸だとか海上権制覇だとかについて予言するなど、時間の浪費だ」<sup>50)</sup> と言っている文言ぐらいだろうか。42年8月に、カミュは2～3カ月の予定で新妻フランシーヌと伴にリヨン近郊の寒村ル・パヌリエ Le Panellier に移動している<sup>51)</sup>。

療養のためフランス本国への渡航を申請していたカミュに42年8月ようやくアルジェリア当局より通行許可証が交付され、彼は妻の親戚の夫人が経営しているル・パヌリエのペンションに滞在することになったのである。

このル・パヌリエへ実際に訪れた経験のある楳木氏によると、「ル・パヌリエはル・シャンボン＝シュール＝リニヨン Le Chambon-sur-Lygnon 周辺の、村落にもならない程の一地名であるが、ル・シャンボンの方はかつてはフランス新教徒の砦でもあり、現在でも新教徒の住民が多く、夏には多くの新教徒の避暑客の集まる場所として知られている」集落であるとのことである<sup>52)</sup>。

楳木氏を参考にこの辺のカミュの足取りを見ると、「最初の予定では・ル・パヌリエでの療養は夏だけにして、彼は11月にはアルジェリアへ帰るつもりで

あった。そこで一足先に妻の Francine がアルジェへ職をさがしに出かけたのである。彼の方は11月21日のアルジェ行きの船を予約していた。しかし11月7日の夜連合軍による北アフリカ上陸作戦が行われ、その直後11月11日にはドイツ軍は南に進出し、フランス全土を占領下に置き、アルジェリアと本国は一切の交通・通信が遮断されてしまった。そこで彼は孤独と貧困の暗い追放の生活に陥いることになった。後にポルトガル経由で妻との連絡がとれるようになったが、彼女に会うことができたのはパリ解放後の44年10月のこと<sup>53)</sup>であった。2～3ヶ月滞在の予定が、政治的・軍事的変化からほぼ2年間ほどの思いがけない新妻との別離という結果になった。小説『ペスト』の冒頭で主人公リュウの妻が結核療養のため、オランを離れ、小説の終わりにリュウは妻の死を知らされるというストーリーは、この時の体験が投影されているのではないかと推測されるし、後の追放のテーマとも関連しているのではないかと考えられる。

1942年に『異邦人』が刊行され、カミュは一躍世界的な文豪にのし上がったが、いうまでもなく1942年という年はフランスではナチス・ドイツの占領下という異常な時代であった。

『異邦人』が日本に翻訳紹介されたのは窪田啓作訳で昭和26年（1951年）だったので、我々には第二次世界大戦後の作品という印象（特に私のような世代のものには）あるが、実際は第二次世界大戦中の、しかもフランスでは占領下という異常かつ過酷な時期であったことは我が日本では看過されがちのように思われる。まさに大変な時期に『異邦人』は誕生したのであった。『異邦人』刊行後、1943年11月にカミュはガリマール社Gallimardの原稿閲読係り(lecteur)につきパリに出ているので、結局ル・パヌリエ暮らしは約2年ほどになる。「ガリマール社の友人たちは、彼のために決断を行った。1943年11月1日から、かれは同社のポストをもらうことになった<sup>54)</sup>」とロットマンは述べている。しかし、そこではすぐに重要職についたわけではなく、ガリマール社では、「カミュはすぐにメンバーの一員に加えられはしたが、同時にまた、アウトサイダーでもあった。社内では新参者に過ぎなかったかれは大司教ポーランの有能で礼儀正

しい助手」<sup>55)</sup>に過ぎなかった。その後「彼は企画審査委員会に加わるように誘われた」<sup>56)</sup>のである。

パリに出るとそこはナチス・ドイツの占領下という異常な状況だったが、オラン時代を含めて、大方カミュは南部の自由地帯で過ごしたことになる。先でも触れたように、アルジェリアでも無風地帯というわけではなかったが、オラン、パヌリエ時代を通じてカミュは取り上げるほどの目に見えるレジスタンス運動はしていなかったというのが事実に近いであろうし、やはり占領地帯の北部と比べると自由地帯の南部では、比較的平穏な雰囲気の中でカミュは過ごしたと言えるのではなかろうか。

ル・パヌリエ時代を通して、幾人かのレジスタンス活動家と接触はあったものの（例えば、P.Pia, F.Ponge, R.Leynaud, およびブリュックベルジェ Bruckberger 神父など）<sup>57)</sup>、『コンバ』紙にカミュを引き込んだのは、またしても P. ピアだった。カミュが『コンバ』紙に携わるようになってパリで出した最初の号は、『コンバ』紙の1943年10月15日の第49号だった<sup>58)</sup>。実際にカミュがレジスタンスとかかわりを持つようになったのは、43年の春ころからだろうと推測されている。ということはパリ生活の最初の数ヶ月の間に、カミュは、関心はあるが実際活動には参加していないレジスタンスの＜仲介者＞——レジスタンスのシンパ程度——から現実に参加し、危険を冒す闘士に変貌していた<sup>59)</sup>ということである。その頃、カミュはガリマール社のオフィスと地下運動という二重の生活をしていたことになる。

しかし、これより以前、レジスタンスとカミュの関係では、のちに『ドイツ人への手紙』*Lettres à un ami allemand* というタイトルで単行本として、刊行されるその第1の手紙が重要であろう。これはフラン・ティールールの秘密機関紙「ルヴュ・リーヴル」*La Revue libre* 1944年2月号に、カミュは＜僕の友であったあるドイツ人の友への手紙＞を書いた<sup>60)</sup>と記したものである。これが『ドイツ人への手紙』（日付としては、43年7月である）の第1号となったものである。



『ドイツ人への手紙（1）』にいたる過程で、これに至るカミュの書いた雑報記事について簡単に振り返っておこう。

フランシス・ポンジュの「『事柄への加担』についての手紙」*Lettre au sujet du "Parti pris de F.Ponge"*は1956年9月に*NRF*誌45号に掲載されたものだが、実際に書かれたのは1943年1月27日である。ポンジュがカミュの『シジフォスの神話』を原稿の段階で読み、1941年8月に批判的な文を書いたのに対する反論ないし弁護のような内容のものだが、レジスタンスとの関係でははっきりとした意志表明のようなものは読みとれない。あえて言えば「私は、私たちの歴史的運命の正確な地点に立って、あらゆる矛盾をしりぞけようとするだけの、人間への嗜好、人間の幸福への嗜好を持っているからです。……不条理の感情、それは死につつある世界である。不条理の意志、それは新しい世界である」<sup>61)</sup>というくらいが当時のカミュの思想と合わせて読みとれるところだろうか。

1941年前半期では、前年の5月に『異邦人』を完成して以来、2月21日に『シジフォスの神話』を完成していることであろう。『シジフォスの神話』については別の項で詳述しているので、ここでは触れないことにする。

41年の1月に書いたものとしては、「果実の準備のために」*Pour préparer le fruit*という文を*La Tunisie française*紙に寄せている（筆者注：旧*Péiade Essais*（Gallimard）＜以下旧PL IIと略す＞のカミュの年譜では1941年となっているが＜p.1949＞、同じ本のp.837では1940年という署名になっている）。この記事は後に「アマンドの木」*Les Amandiers*と改題され、短編集『夏』*L'Été*（1954）に再録されているが、ナポレオンの「長いあいだにはサーベルはかならず精神によって打ち負かされる」という言葉を引用したあと、カミュの当時の内面を推測させるような幾つかの文言がちりばめられている。それらの文言を列挙してみよう。

「我々の欲することとは、まさしく、もはやサーベルの前に屈服しないこと、精神につかえない力をもはやけっして正しいと認めないことである」。

「我々は自己の欲するものを知り、断固として精神の側に足を留めよう。なによりも重要なことは絶望しないことだ」。

「我々は悲劇の時代に生きている。けれどもあまりにも多くの人々が悲劇と絶望とを混同している」。

「私の言いたいのは、今なお不幸に満ちたヨーロッパで生きることの重みがあまりに重く感じられるとき、往々にして私は多くの力がいまだに無傷のまま残っている光り輝く国々の方を振り返るのだ」。

「世界は完全に、ニーチェが重力の魔と名づけた病に侵されている。それに手を貸すことはやめよう」。

「賭けられた勝負の巨大さを前に、ともかくも氣力を忘れないことだ」。

「世界の冬に、果実を準備するのはそうした力なのだ」<sup>62)</sup>。

1941年5月24日の *La Tunisie française* 紙に寄せた「麻屑の火のような」*Comme un feu d'étoupe* については先で触れた。

記された日付が旧 Pléiade Théâtre Récits Nouvelles (Gallimard) <以下旧 PL I と略す> (pp.1951-59) においてもわからないが43年に「ペストのなかの追放者たち」*Les Exilés dans la peste* という記事を *Domaine français* 誌に寄せている。先ほどル・パヌリエでの妻との離別体験は小説『ペスト』に投影されているのではないかと考えたが、この記事は『ペスト』の第二部第一章とほとんど同じである。『ペスト』はナチスの暴虐の寓意だという解釈がなされていて、これはこれで検討の余地があるものの、この文は「妻との離別体験」以上にナチス・ドイツに占領されている故国フランスの状況を、それこそ寓意的に記したものであることは否定しがたいものである。

42年の7月に『異邦人』をガリマール社から出版し、同年12月に同じガリマール社から『シジフォスの神話』を刊行していることは周知のところだ。その後、レジスタンスとの関係で見るとしては、「選ばれた者の肖像」*Portrait d'un élu* だろうか。

この一文は43年4月に雑誌『南方手帳』*Cahiers du Sud* に発表されたものだが、哲学者ジャン・ギトン Jean Guilton によって書かれた『プジェー氏の肖像』*Le Portrait de M. Pouget* (1940年) (「プジェー氏とは誰か? 聖伝の考察にふけり、自分の一生を終える小さな修道僧独房へ何人かの学生を受け入れて

いる、ほとんど盲目の、ラザリスト修道会の老聖職者である」＜この説明文はカミュの本文から転写翻訳したものである。旧PL II p.1597参照）についての感想文のようなもので、レジスタンスとの関係では、そこに何かを読み取ることはできない。

1943年3月18日という日付のある「ピエール・ボンネルへの手紙」*Lettre à Pierre Bonnel* という一文は、『シジフォスの神話』への批判的感想文に対する返事である。

「この書物の持つ深い思想はといえば、形而上学的ペシミズムから、人間に絶望すべきだという結論は少しも導きだされない——いや、それとは正反対だということなのです」<sup>63)</sup> という文言がカミュの当時の思想の一旦を垣間みせている。

43年7月に書かれた「知性と断頭台」*L'Intelligence et l'échafaud* という一文は『コンフリュアンス』誌 *Confluences* 21-24合併号に掲載され、のちに「小説の問題」*Problèmes du roman* と改題され、旧PL Iに再録されたものだが<sup>64)</sup>、分量としては約7ページほどの短いものである。ラファイエット夫人の『クレヴの奥方』を例に引き、小説における「知性ないしは理知」の重要性を論じたもので、カミュの文学論としては非常に貴重なものだが、これまたレジスタンスとの関係では、そこに彼の意図はほとんど読み取れないものである。

カミュの『異邦人』について書いたベルナール・パンゴー Bernard Pingaud が、この作品には彼の实生活において体験した経験がほとんど反映されていない<sup>65)</sup> と看過したが、カミュには文学作品においては「日々の生活において少し政治参加はするが、作品においてはそれは望まない」<sup>66)</sup> というのが創作上の信念であったとすれば、書かれたものにレジスタンスへの参加を示すような文言があまり明確な表現で見られないのは、当然であると言えは当然である。

かなり明確にレジスタンス参加への意志を示したのは、先程触れた『ドイツ人への手紙』*Lettres à un ami allemand* であろう。これは架空のあるドイツ人へ宛てた手紙の形式をとり、都合4通書き、終戦後1948年ガリマール社から

単行本として刊行されているが、「第1の手紙」*Première lettre*は地下誌『雑誌自由』*La Revue libre*の第2号に43年7月に寄稿したものである<sup>67)</sup>。イタリア語版が刊行されたとき、カミュはそれに序文を書き「この書は、ひそかに書かれ刊行されたのである。これは当時我々が止むにやまれず従事していた闘争の意味をいくらかでも明らかにし、それによってこの闘争をさらに効果的なものにしたいという目的を持っていた。つまり際物的なものであり、従って不公平な色合いを帯びることもありうる。実際、敗れたドイツについて書かねばならなかったら、もう少し違った言葉使いをすべきだったろう」<sup>68)</sup>と述べたあと「この手紙の筆者が、＜きみたち＞というとき、それは＜ドイツ人一般＞を意味せず、＜ナチスの人たち＞を意味する。また、＜我々＞というとき、それは必ずしも＜我々フランス人すべて＞を意味せず、＜我々自由なるヨーロッパ人＞を意味する。・・・私が憎悪するのは、死刑執行人のみである」<sup>69)</sup>と「相手」と「私」の意味するところを解説している

レジスタンスへの動きの第一歩を踏み出したことをしるす「第1の手紙」において、カミュはドイツの青年と「世界は何一つ意味を持たない」という「不条理」な世界観を共有していることを述べたあと、「目的はすべての手段を正当化するものではない」という彼の基本理念においてドイツの青年と袂を分かち、次のように述べている。

「いや、追求している目的にすべてを屈従させるべきだということを信じることはできません。許されない手段というものがあります。それで私は、正義を愛しつつ同時にわが国を愛することができればと思っています。私は祖国のためならどんな種類の偉大さでもさしつかえない、よしんばそれが血や虚偽の偉大さであってもかまわない、とは思わないのです。正義を生かしつつ、祖国を生かしたい、と願っているのです」<sup>70)</sup>

「不条理」に対して立ち向かう姿勢が「君たち＝ドイツ・ナチの青年」と「私」との相違だとカミュの「反抗」の姿勢がそこには読み取れるだろう。

「我々は、確信を、大義名文を、正義を所有している。君たちの敗北は避けられない。私は、真理それ自体の力を決して信じなかった。しかし、同じエネ

ルギーならば、真理は虚偽に打ち克つ、ということを知るのは大変なことである。……あらゆる文化に必要な威厳の部分を見出すには、絶望的な忍耐と注意深い反抗（点々筆者）とが長期にわたって必要だと思う」<sup>71)</sup>。

第2～第4の手紙では、「主としてドイツ人の国家至上主義が批判の対象」<sup>72)</sup>となっている。第2の手紙では「……ドイツ人は、祖国ドイツを真理の前に絶望の上に置くのです。……よしんばときおり我々が祖国よりも正義を好んだとしても、それは祖国を正義のなかで愛したいと欲したからなのだ。……この点において我々は君たちと別れたのだ。……真理とは何であるかを知らないとしても、我々は少なくとも、虚偽とは何であるかを知っている。……我々は祖国の奴隷とはならなかった。祖国のためならどんなことでもする、などということにはなかった。……知性に怒りをつけ加えるには、一人の死んだ少年で充分だった。（下線部は筆者。これはナチの護送トラックから無実の少年が脱走し、ゲシュタポによって射殺された「事件」を頭に描いて言われたものだろう）……困難な時期において我々を支えるのは、あの絶望的な希望である。我々の仲間が死刑執行人よりも辛抱強く、弾丸よりも数が多いであろう。さてごらんのようにフランス人は、怒ることもできるのだ」<sup>73)</sup>。

「第3の手紙」はヨーロッパ観の相違とでも言えるものである。

「君たちはヨーロッパについて語る。しかし、君たちと我々の相違は、君たちにとってはヨーロッパは一つの所有地だが、それに反し我々は、我々がヨーロッパの従属地であると感じている、という点である。……君たちと我々の間に、共通な尺度はない。……君たちのヨーロッパは、全ヨーロッパ人を糾合したり、あるいは熱中させたりするなにもものも持たない。我々のヨーロッパは、君たちの意思に反し、知性の風の中で追求をつづけている共同体の冒険なのだ」<sup>74)</sup>。

「第4の手紙」は、カミュの不条理思想と「反抗」の思想を基礎に据えた人間観のかなり明確な表明であり、ナチスとの相違を陳述したものである。

「我々はともに長い間、この世界には最高の理由はなく、我々は絶望に陥っていると信じていた。いまでも私はそのことを、ある意味において信じてい

る。・・・ほんとうのことを言えば、君たちと同様に考えていたと信じていた私は、正義への激しい嗜好以外、君たちに反対する論拠をほとんど見出さなかったのである。・・・どこに相違があったのか？それは君たちが軽々しく絶望することを承諾し、私が絶対にそれに同意しなかったことである。・・・人間は永遠の不正に対して闘うために正義を肯定すべきであり、不幸な世界に対して抗議するために幸福を創造すべきであると思ったのだ。・・・私は、この絶望とこの拷問された世界とを肯定することを拒否し、ただ、人間がその悲痛な運命との闘争をはじめするために、連帯責任をふたたび見出すことを望んだのだ。我々は、おわかりのように、同じ原理から異なったモラルを引き出した。・・・君たちは不正を選んだ。・・・私は、君たちとは反対に、大地に忠実であるため正義をえらんだ。この世界には最高の意味がないことを、私は信じつづける。しかし、この世界のうちにあるなにかが意味を持っていることを知っている。それは人間である。なぜなら人間こそ、意味をもつことを要求されている唯一の存在だからだ。この世界には少なくとも人間という真理がある。・・・ところで世界は、人間以外の理由を持たない。もし人々がつくりあげる人生観を救おうとすれば、人間をこそ救わねばならない。・・・君たちの論理は、君たちの心と同様に罪悪であるから、私は君たちと闘うのだ」<sup>75)</sup>。

「第1の手紙」の起草の時期が43年7月であり、「第2の手紙」が43年の12月、「第3の手紙」が44年の4月、そして「第4の手紙」が44年の7月の日付を持つが、「第1の手紙」も「第2の手紙」もその発表は44年になってからであるので（筆者注：Cahiers de la Liberation, No3に発表された）、従って榎木氏のいうようにその「政治的有効性はそれほど大きいものとは思われない」<sup>76)</sup>というのが実情のようであった。「第4の手紙」はカミュの思想表明としては、非常に格調の高いヒューマニズム思想を鮮明にした文章だが、パリ解放直前のものなので、これも政治的プロパガンダとしては、その有効性はそれほど過大評価はできないだろう、と言わざるを得ないのが公平なところだろうか。

注

- 1) 渡辺 淳『20世紀のフランス知識人』（集英社新書）pp.88-89
- 2) 戦争が始まると動員されアルザス地方の寒村で軍務についていたサルトルがメモをしたものが『奇妙な戦争』という本にまとめていることは周知のところである。
- 3) この辺のパリの雰囲気はサルトルの「占領下のパリ」*Paris sous l'occupation* (Jean-Paul Sartre : *Situations*, III . < Gallimard > 参照
- 4) 海原 峻『フランス現代史』（平凡社）p.114-115参照。同じような整理の仕方を榎木氏も行っている『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）p.162
- 5) 淡 徳三郎『レジスタンス』（新人物往来社）序言のページ
- 6) 海原 峻『フランス現代史』（平凡社）p.162参照
- 7) 淡 徳三郎著『レジスタンス』（新人物往来社）pp.11-12
- 8) 桜井哲夫『占領下パリの思想家たち』（中公新書）p.41
- 9) *ibid.* pp.54-55
- 10) サルトルの「占領下のパリ」*Paris sous l'occupation* (Jean-Paul Sartre : *Situations*, III . < Gallimard > 参照)
- 11) H. R. Lottman : *Albert Camus* (Gallimard), p.307
- 12) アーサー・ケストラー『現代の挑戦』（荒地出版社）1958年 p.143
- 13) 淡 徳三郎著『レジスタンス』（新人物往来社）p.24
- 14) *ibid.* p.26
- 15) *ibid.* p.55
- 16) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）p.166
- 17) 淡 徳三郎著『レジスタンス』（新人物往来社）pp.57-58参照
- 18) *ibid.* pp.59-60
- 19) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）pp.166-167
- 20) *ibid.* p.166
- 21) *ibid.* p.166
- 22) 淡 徳三郎著『レジスタンス』（新人物往来社）p.94
- 23) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）p.166
- 24) 淡 徳三郎著『レジスタンス』（新人物往来社）p.95
- 25) *ibid.* p.96
- 26) 桜井哲夫『占領下パリの思想家たち』（平凡社新書）p.174
- 27) 淡 徳三郎著『レジスタンス』（新人物往来社）pp.98-100参照
- 28) *ibid.* p.100参照
- 29) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）pp.162-63
- 30) 淡 徳三郎著『レジスタンス』（新人物往来社）p.69
- 31) *ibid.* pp.69-70
- 32) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）pp.163- 4

- 33) 淡 徳三郎著『レジスタンス』新人物往来社 p.73
- 34) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）p.163
- 35) 淡 徳三郎著『レジスタンス』（新人物往来社）p.83
- 36) *ibid.* p.125参照
- 37) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）pp.163
- 38) 淡 徳三郎『レジスタンス』（新人物往来社）p.251
- 39) *ibid.* p.131参照
- 40) *ibid.* p.133
- 41) *ibid.* pp.134-135
- 42) *ibid.* p.135
- 43) *ibid.* p.135
- 44) *ibid.* p.136
- 45) *ibid.* p.136
- 46) *Paris-Soir* 紙はカミュやピアがひどく嫌っていた娯楽記事を載せる新聞だった＜ H. R. Lottma : *Albert Camus* (Seuil) p.237参照
- 47) H. R. Lottma : *Albert Camus* (Seuil) p.239
- 48) *ibid.* pp.242-243
- 49) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）p.175参照
- 50) 旧 PL II p.1466
- 51) A.Camus et J. Grenier : *Correspondance, 1932-1960*, Gallimard, 1981, p.73参照
- 52) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）p.182
- 53) *ibid.* p.183
- 54) H. R. Lottma : *Albert Camus* (Seuil) p.326
- 55) *ibid.* p.308
- 56) *ibid.* p.309
- 57) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）p.183
- 58) H. R. Lottma : *Albert Camus* (Seuil) p.315
- 59) *ibid.* p.320
- 60) *ibid.* p.303
- 61) 旧 PL II .pp.1666-1667
- 62) 以上幾つかの引用文は、短編集『夏』からのものである。旧 PL II pp.835-837参照
- 63) 旧 PL II. p.1422
- 64) 旧 PL I p.1887.
- 65) Bernard Pingaud: 「Connaissant les préoccupations qui étaient celles de Camus dans les années 1938-40, on ne peut qu'être frappé de voir combien peu *L'Étranger* les reflète. < *l'étranger de CAMUS* (Classiques Hachette) 1970. p.12
- 66) Albert Camus : *Carnets II*, (Gallimard) p.180



カミュとレジスタンス（その１）（平田）

- 67) 「刊行者のノート。第一の手紙は、1943年「ルヴュ・リーブル」誌第2号に、第二の手紙は、1944年初頭「解放手帳」誌第3号にそれぞれ発表された。第3と第4とは「ルヴュ・リーブル」誌のために書かれたが、発表されずに終わった」ものである）。＜旧 PL II .p.218
- 68) Albert Camus : *Lettres à un ami allemande*. (Gallimard). 1948. p.14
- 69) *ibid.* p.15
- 70) *ibid.* pp.19-20
- 71) *ibid.* pp.28-30
- 72) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）p.206
- 73) Albert Camus : *Lettres à un ami allemande*. (Gallimard). 1948. pp.35～51
- 74) *ibid.* pp.55～66
- 75) *ibid.* pp.69～82
- 76) 榎木 栄一『アルベール・カミュとその時代（上）』（駿河台出版社）p.206